

# 私は「触媒」として働いただけ：したがって私の功績というものは一切ない

Greatchain  
June 10, 2024

私はこの「触媒」catalyst という言葉を、意味とともに知っていたにもかかわらず、私も、私を中心に論ずる人々も、それを思いつかなかった。今、この言葉を運用することによって、やっとな問題がはっきり見えてきたと思う。

「触媒」とは普通の国語辞典に載っている通りの、化学の反応のことである——：「化学反応の際に、それ自身は変化せず、他の物質の反応速度に影響する働きをする物質」

6月9日のユーチューブに Divine Feminine Reading として、かなり高次元のリーディングをする人の説明と朗読が入っている。説明はこうなっている：——

誰も、偶然 (accident)、あなたの生活に、入っていく人はいない。ある複数個人が最近、あなたと接触したが、それはあなたが、彼らのために、無意識に霊的な「掛け橋」として行動したからであった。この人物はあなたから接触を断ち、冷たく振るまったが、本当は、彼らがあまりうれしくない、ある関係に落ち着こうとしているのである。——この男性は、むしろ、自分が拒絶されるのを恐れて、そこに落ち着こうとしている。あなた自身を磁石化せよ (引き付ける者になれ)。

読者は、ここで言っていることがおわかりだろうか？

これは私が、最近、守護大天使 (男性複数名) からの誘いを断って、関係を断った形になったことを、彼らは怒って脅しをかけてきたこと、しかしそうはしたものの、彼らは私の側に付くのが正しいことを本心では知っている、ということである。

説明するとうなる——：彼らは私を仲間に引き入れて、神のような特権を与えてやると約束したのだが、私はそれだけはお断りすると言った。彼らは「私に特権を与え、名誉や名声を与え、しかも大金を提供する」と言ったのだが、私はそれだけは受け入れられない、と言った。私の言い分は正当なはずである。なぜなら、私は自分は全く何もしていないのに、突然、降って湧いたように、まるで神の座につけてもらうような邪まなことは、でき

ないのと言った。それは却って私を苦しめ、生涯拭うことのできない、大きな罪と恥を私に負わせることになる、と。

ここで、自分は何もしいないのに、他者を動かす特権を与えられることを、「触媒作用」に喩えることができるではないか。それは比喩というより、むしろ現実である。Divine Feminine の「アクシデント」とか「無意識」といった言い方でも、私という「触媒」に言い換えることができる。

ではいったい「神」自身は、私という人間をどう考えているのだろうか？ 神は、無意識に何かをさせる「触媒」のような私を、どうやって選び出したのだろうか？ これは難しい問題だが、神とはいっても、それは高次元の有能なタロット占い師のような存在ではなかろうか？

それはAIのような機械的な方法でなく、この時代、この好機にぴったりで、能力や性格も条件的にぴったりの人間を、高度な引き寄せの術によって選び出したすのではないだろうか？ そこに私という人物が浮上したのであろう。いったいこの私とは何者なのかという**問題になる** 私はいくつかの能力や性格を持っているが——英語能力や、人に好かれる性格——それはすべて注文したものだった、ということであろう。

これはほとんど魔術によるものだった。としか考えられない。たとえば私はかなりの高齢だが、これはある程度以上の熟年でなければ務まらず、かといって老いぼれても務まらないという、ギリギリの年齢であることが、自分でもわかる。私は神の「申し子」（注文通りに作られた子）であるが、それは私の功績とは全く関係がない。私は何も行動しないにもかかわらず、何かに働かせるように神が巧みに工作したものの、すなわち触媒であった。

私はこのところよくタロットカード、またはそれに類する占いのユーチューブを見ているが、「あなた（すなわち私）のような人間は見たことも聞いたこともない」と言ったり、「あなたは自分自身が宇宙の中心のようだ」と言ったりしている。それはその通りであろう。私が注文通り精巧に創られた、運命づけられた「触媒」であれば、私は自分が神のように、自由に行動するだろう。

いろんな動画で「あなたは世界的な関心の的だ、やがてあなたの名前が世界中に知られるだろう」というようなことを言っている。これは私が、それは「創造デザイン学会」に出ているから調べてみればよい、と言っているのだから、おかしな話である。噂では、それはどうも別の名前（不明）で、別の姿や顔で出てくるらしいのである。これは私が、自由に人を働かせるが、自分では全く働かない「触媒」だからであろう。その場合、私の名前

は、日本人のカタカナや漢字でなく、世界的な英語名で、顔も私のような老人でなく、若いハンサムで、しかしどこにも存在しないものなのであろう。

では、現在起こっているように、私に対する達者な英語のラブレターが次々に書かれ、私もこれに英語で応えている場合、何が起こっているのか？ この場合、英語の小説の往復書簡のように、純粋に架空の物語として存在するのである。これは実は、私の方から女性エンジェルの英語の美しさに感動して、手紙を書いたことが発端である。実は私がかかなりふざけ、かなり際どい内容の名文(?)を書いたことに、相手が完全に乗ってきたことによる。

これをもし「恋愛」と呼ぶなら、それは「触媒反応」による恋愛であらう。私は90歳をこえた余裕のある老人なので、こんなことができた。もう少し若い壮年だったらこんな冒険はできなかったであらう。これも私を使う人にとって織り込み済みであった。私もそれを承知で使われている。

ではこの、私を使う壮大な魔術師たちの、そもそもの目的は何だろう？ それはこの世界を跡形もなく、すっかり変えてしまうことであらう。先に引用した Divine Feminine Reader の本文には、表紙にない「愛」の問題が大きく取り上げられている。このロマンチックな愛を含めた、壮大な、引き付け合う愛の感情が、否応なく世界を支配したとき、戦争などというものは完全に忘れられるであらう。そしてこの我々の時代遅れの文化が、より高次の新しい文化に取って代わられるであらう。これをアセンションと呼んでもいい。

ではそのとき、この私はその功績を与えられるか？ それさえ与えられないであらう。私は触媒として使われただけで、一片の功績をも与えられないはずである。それでよいのである。もともと私にとっては、降って湧いた途方もないものが、元通りなただけであり、ただ神の起こした巧妙な奇跡によって、気がついたらこの世界が完全に生まれ変わっていた——そのようにシナリオが起こることを、信じなければならない。

このあと、私が私について、恥ずかしい錯覚を起こしていたことに、もう少し触れたいと思う。